

## ペスタロッチー教育賞 受賞者紹介

広島市教育委員会 主事 <sup>わだ</sup>和田晋氏  
広島市立二葉中学校 前校長

和田晋氏は1956年に出雲市に生まれ、広島大学教育学部へと進学し、当時の教育研究室にて大谷光長教授および藤井敏彦教授からケルシエンシュタイナー教育とマカレンコ教育の最先端に触れるとともに、長田新教授の著作・翻訳を通じてペスタロッチーの教育と出会う。自らの長男に新（あらた）と命名するほどに長田教授の研究と実践に心酔し、その著作はもちろんのこと、長田新監訳によるペスタロッチー全集を読みふける学生生活を送る。和田氏は1982年に広島大学大学院学校教育研究科修士課程を修了し、広島市内の公立中学校に国語科教員として着任する。その後の和田氏の実践に多大な影響を与えたのが、長田教授を通して出会ったこのペスタロッチーの姿と生き方であった。

校内暴力の嵐が吹き荒れ、貧困を背景とした子どもたちの荒れが学校において噴出していた着任当時の生徒を目の当たりにした和田氏は、1988年から広島市内繁華街を中心に夜回りを始め、2003年からは広島市教育委員会にて暴走族対策と少年自立支援を担当することとなった。学校でたばこをふかし、深夜に徘徊する生徒の多くは、貧しい家庭環境に育ち、周囲の誰からも愛されることのない子どもたちであった。この子どもたちにペスタロッチーの愛の精神でぶつかっていった和田氏は、家庭訪問を繰り返し、深夜の夜回りに出かけては、暴力団から抜け出させることもたびたびであった。

和田氏は2008年には広島市立可部中学校教頭として学校現場に復帰すると、2010年からの広島市立亀崎中学校校長を経て、2013年から2017年までの4年間に亘って広島市立二葉中学校の校長を務めた。二葉中学校区は「こども療育センター」をはじめとする福祉施設や児童養護施設をかかえ、多様な背景や課題のある子どもたちが通学している。同校に着任した和田氏は、二葉のFを頭文字とする3F（Family, Friendly, Future）をスローガンとして、過去を振り返るのではなく未来に向かうチャレンジを家族のような絆を軸に実現していく理念を、教職員だけではなく生徒および保護者とも共有しながら学校経営にあたった。4年間の校長としての取組は、居場所を失って深夜の街を徘徊する子どもたちに声をかける夜回りと同様に、学校や教室を飛び出す生徒たちに「ゆっくり」「じっくり」と声をかける教職員との取組へと通じるペスタロッチーの精神に根ざした実践であった。

以上のように、居場所を失い徘徊する子どもたちに、過ちやつらい記憶とともにある過去を見つめさせるのではなく、あたたかいまなざしのもとで未来へと励まし続けた和田氏の取り組みは、困難な状況に置かれた子どもたちに愛の精神でまなざしをかけ、人間学校の探究のもとで人間を人間にする教育を実践してきたペスタロッチーの精神に通じるものである。今日の地域の場合及び学校教育の場における和田氏の長年に渡る地道な実践に対し、第27回ペスタロッチー教育賞を贈り、その功績を称えたい。

## ペスタロッチー教育賞 受賞団体紹介

児童養護施設 <sup>まいづるがくえん</sup>舞鶴学園

児童養護施設 舞鶴学園は、戦後70年以上にわたり、虐待や貧困、保護者の死や病気等、なんらかの理由で保護者とともに暮らすことができなくなった子どもたちに生活の場を提供し、彼らの生活を支えてきた。

そもそも舞鶴学園は、元新聞記者の山口勲氏が、1946年に有志数名と共に私財を投げ打って「財団法人 日本青少年自彊学会」を創設し、戦争孤児11名を引き取って養育を開始したことに始まる。戦争孤児の養育の場として始まった「舞鶴自彊学園」は、1948年に児童福祉法の制定によって約50名を収容する養護施設となり、1952年には社会福祉法人の認可を受けて、「舞鶴学園」と名称を改めた。以来、社会のニーズと共に、定員を70名、100名と増加させた。

しかしながら、その一方で少子化や社会情勢の変化によって子どもたちを取り巻く環境も彼らが抱える問題も複雑化し、従来の大人数を対象にした施設経営の限界を感じるようになる。学園は「問題を抱えた子どもたちが自分を取り戻していく場として、「一人ひとりが大切に受け止められている」「大人は信頼するに足る存在である」と実感することができる場として機能する必要がある」（舞鶴学園 HP より）との認識に基づき、家庭的な雰囲気での養育の可能性を模索することになる。

その結果、2001年に、日本の多くの児童養護施設が1舎につき20名以上を定員とする大舎制をとっているのに対し、舞鶴学園は1舎につき定員12名以下で生活する小舎制に移行し、施設内の七つの家で幼児から高校生までの子どもたちが職員とともに暮らす体制を作り上げた。また、「子ども会」という組織を学園内に設置し、子どもたちが自分たちの意見をまとめて生活に反映させる仕組みを作り出している。こうした取り組みによって、子どもたちが家庭的な暖かさや信頼感を感じることのできる距離感、さらには人との関わり大切さと自己が存在することの意味を体験しながら育ち合うことを可能にしている。

こうした子どもたちが育ち合いながら生活する様子は、2008年にMBSTVドキュメンタリー映像'08『家族の再生』として、2015年にNHKハートネットTV戦後70年『戦争孤児から虐待まで』として放映され、大きな反響を呼んだ。また2015年には韓国の児童福祉施設との日韓交流（単独）事業20年目を迎えて、「高円宮記念日韓交流基金」より名誉総裁章を受賞している。

以上のように、戦争孤児の救済・養育から始まり、子ども一人ひとりに寄り添いながら家庭的な雰囲気の中で養育しようと奮闘してきた舞鶴学園の取り組みは、貧民・孤児のために身を尽くしたペスタロッチーの思想と実践にまさに通じるものである。困難な状況に生きる子どもたちに生活を通じた居場所をもたらししてきた舞鶴学園の長年の活動に対し、第27回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。